

駿河湾の深海魚 (7)  
ツラナガコビトザメ (その1)

久保田 正・佐藤 武



図1 ツラナガコビトザメ  
TL: 193.1mm、雄 1969年10月サクラエビ混獲

ツラナガコビトザメ *Squaliolus aliae* (図1) は、ツノザメ目、ヨロイザメ科、ツラナガコビトザメ属に含まれるオオメコビトザメ *S. laticauda* と共に小型のサメ類として知られています。本属の2種の内、オオメコビトザメの最大全長は280mmであり、一方、ツラナガコビトザメのそれは220mmで少し小さく、世界中のサメ類約540種の中で最も小型の種類として知られています。本種は、西太平洋の相模湾以南の南日本、東シナ海、フィリピン、オーストラリアの北部と東部などに散在して分布します。陸地に近い海域の表層から中層の水深150~2,000mに生息して昼間は深部へ、夜間は浅部へ移動する日周鉛直移動を行なっています。体は、細長く、紡錘形であり、黒色、眼は小さく、第一背鰭には棘がありますが、第二背鰭にはこれを欠いています。また臀鰭を欠いています。腹面には発光器を有しています。成熟は、全長が雄では150mm以上また雌では170mm以上であり、他のツノザメ類と同じように卵胎生です。

駿河湾内でサクラエビ漁が毎年春季(3~5月)と秋季(9~12月)に行われています。本種は、4~6月にサクラエビと共に網に入り、その数は多くないのですが、混獲物中から採集することができます。一回の出漁では、1~3個体の入網が多く、多くても10個体です。毎年5月に多く入網することが判りました。ラブカというサメが春季に駿河湾の沿岸域で各種漁法により得られることが多いのは産卵のためと言われています。本種も同じように産卵と関係していると思われます。

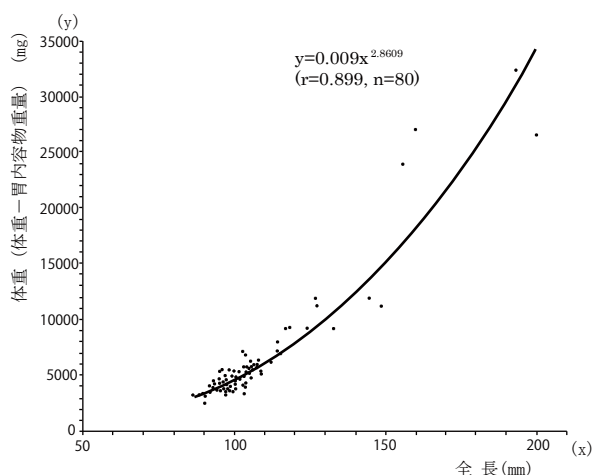


図2 全長(x)と体重(y)の関係  
サクラエビ混獲標本  
(1969~1996年に得た80個体)

本種は一度に多数個体は得られないので、永年に亘り本種の採集を継続して行い、27年間によろやく91個体に達しました。それらの標本は、雌が37個体そして雄が54個体で全長95~110mmの範囲の個体が全体の67.1%を占めました。本種が夜間のサクラエビ曳き網で混獲された網の深さは、5~500mの範囲でした。図2は、得られた本種の全長(TL)と体重(BW)の関係を示しています。

なお、近縁種のオオメコビトザメは、全く採集することはできませんでした。本属の2種は、それぞれが別の研究者により発表されましたが、後に同一種であるという見解により1種として扱われてきました。しかし、Sasaki & Uyeno(1987)が2種の形態比較の研究を行い、それぞれ再び独立種であることを明らかにして現在にいたっています。